

イングランド歴史教育再考（１）

－カリキュラム・教科書・評価問題の三者分析を手がかりに－

Reconsideration about History Education in England [1]

-Based on the analysis of curriculum, textbook and assessment-

竹 中 伸 夫

I. 問題の所在

本発表の目的は、2007年版ナショナル・カリキュラム「歴史」¹⁾（以下、2007年版と略記）、KS3用歴史教科書『ブリテン 1783-1918』²⁾、評価問題（2011年版の AQA の GCSE）³⁾ の三つを手がかりに、イングランドの歴史教育について、考察することである。なぜこのような研究を行うのか。理由は大きく二つ挙げられる。

一つは、イングランドのナショナル・カリキュラムの不明瞭性である。筆者は以前、1991年版ナショナル・カリキュラム「歴史」と教科書を手がかりに、イングランドの歴史教育に関して分析を行った⁴⁾ ことがある。同カリキュラムは、その後、1995年版、1999年版、2007年版（中等のみ）と改訂が行われ、改訂を重ねるごとに、その記述内容が簡素化していくという経過をたどっていった。結果として、1991年版と2007年版とを比較すると、確かに、類似する記述も散見されるが、簡素化の結果、その実態が十分に判断できなくなっている現状がある。よって1991年版を分析した際に対象としたカリキュラム・教科書に評価問題を加え、現在のイングランドの歴史教育の特質を解明しようと考えた。

二つは、意図されたカリキュラムだけの分析からの脱却である。カリキュラムは、制定された後、実践者によって解釈された上で実践される。すなわち、制定されたカリキュラムがそのまま実践されるというわけではない（簡素化の理由は実践者の裁量の拡大を志向するためといわれる⁵⁾）。つまり、ナショナル・カリキュラムの場合、解釈されて実践されることが前提となっている）ということである。イングランドの歴史教育の特質を解明しようとする時、解釈され実践される前のカリキュラムでしかないナショナル・カリキュラム「歴史」の分析だけで問題ないのか。そこで、制定されたカリキュラムを実践者が解釈する時の参考にすると思われる評価問題の分析を加えることで、実践されたカリキュラムについても部分的に分析の対象に加えられるのではないかと考えたからである。

以上のような理由から、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのそれぞれで、カリキュラム・教科書・評価問題それぞれをもとにその歴史教育の特質を解明し、Ⅴでイングランドの歴史教育について再考

することとしよう。

Ⅱ. 2007年版ナショナル・カリキュラム「歴史」からみたイングランド歴史教育—主観的歴史認識形成学習—

2007年版は、中等（KS3以上）のみの改訂である。つまり、現在、イングランドにおいては、KS1（5～7歳）、KS2（7～11歳）、KS3（11～14歳）において、歴史の学習がカリキュラム上、必修科目として設定されているが、このうち、KS1とKS2については、1999年版、KS3については2007年版に基づいて行われているということである。KS1とKS2の歴史学習はあくまでKS3の基礎であるから、本研究では2007年版を分析対象とする⁶⁾。

2007年版においては、「Programme of study（学習プログラム）」と「Attainment target（到達目標）」が提示されている。「学習プログラム」には、四つの下位項目がある。「Key concepts（重要な概念）」、「Key processes（重要な方法）」、「Range and content（学習の範囲と内容）」、「Curriculum opportunities（カリキュラムによって提供される機会）」である。

まず、「重要な概念」は、歴史の学習において学習者に考察させたい歴史についての見方に関する項目で、年代史的理解、文化的・民族的・宗教的多様性、変容性と継続性、原因と結果、歴史的意義・意味、解釈としての歴史、からなる。次に「重要な方法」は、歴史的探究、証拠の活用、過去を表現すること、の三つからなり、歴史の学習において学習者に考察させたい歴史認識の方法に関する考え方に関する項目といえる。これら二つに書かれている内容が、イングランドの歴史教育において目標としてその育成が強く求められるものといえる。次に「学習の範囲と内容」である。ここでは、いかなる事象を取り上げるべきか、すなわち学習内容の概略、が示されている。「英国の歴史」と「ヨーロッパ史・世界史」に分けて提示している。前者については「中世から20世紀にかけての政治権力の推移、支配者と被支配者の関係性における変化、王権と国会との関係性における変化、民主主義の発達、を含むこと」、「イングランドとアイルランドとスコットランドとウェールズの人々の歴史、および、それらの人々の関係性に見られる変化」、「イギリス諸島への、イギリス諸島からの、イギリス諸島内での、多様な人々の移動・定住によって生じた影響の歴史」、「ブリテン島の人々の生活様式、信念、考え方、態度が歴史的に変化してきたこと、および、技術発達、経済発展、戦争、宗教、文化といった諸要因が、こうした変化にどのように作用したか」、「貿易や植民地化、工業化や技術、大英帝国の発展とそれらによるブリテン島内外の多様な人々、植民地化以前の文明、奴隷貿易の本質と効果、抵抗と反植民地化運動への影響」の五つが提示されている。後者については「政治的・社会的・文化的・宗教的・技術的・経済的発展、および出来事が、過去のヨーロッパや世界に与えた影響」と「国家間および民族間の紛争と協調の特徴に見られる変化とその変化に国家的・民族的・人種の・文化的・宗教的要因の影響が続いていること、二つの世界大戦とホロコー

ストの本質と影響、紛争解決にむけたヨーロッパや国際機構の役割、を含むこと」という二つが示されている。教育現場での裁量の拡大を志向したこれまでの改訂の流れを受けて、現行カリキュラムでは、大まかな基準と指針程度としてしか提示されていないが、次に示す学習方法（活動）が可能となるような学習領域・内容が示されているといえるだろう。そして「カリキュラムによって提供される機会」では、歴史の学習において採用されるべき学習方法（活動）について書かれた項目で、今と過去との結びつきを探究すること、地域や個人の歴史と当時の社会全体の歴史との関連を調査すること、過去を通じて形成された現在の我々の考え方を評価すること、ICTを活用すること、他教科と関連させた学習を行うこと、の五つが設定されている。

他方、「到達目標」である。これは、先の「学習プログラム」の記述内容（「重要な概念」と「重要な方法」で示された目標ともいうべき記述内容、「学習の範囲と内容」の学習領域、「カリキュラムによって提供される機会」の学習活動）によって実現させたい教育目標を、段階性を持たせて提示したものである。本来は、全部で九つのレベルからなるが、2007年版は中等のみの改訂であるため、レベル4以上の六段階に分けて提示されている。この「到達目標」の検討を通して、歴史教育の特質に迫ろう。そのために、表1を作成した。表1は2007年版の「到達目標」を訳出して左列に提示し、その文言を筆者が設定した四観点に基づき再編し、その段階性を抽出・提示したものである。表中上部に網掛けしている部分は筆者の分析による。以下、この表1をもとに、イングランドの歴史教育について考察しよう。表1にもあるように、2007年版の到達目標は、レベル毎にまとめて書かれているが、大きくは四つの観点を含みこんでいることが分かる。それぞれ「知識・理解とその活用」、「本質的理解」、「解釈の構築と資料活用」、「文章化」と定義しておこう。この四つの観点から、イングランドの歴史教育の特質を端的にまとめると、歴史は主観的な構築物であるとの前提に立ち、主観的な構築物である以上、歴史的变化・継続性・相違性・因果関係といった様々な観点から吟味・探究し、その過程で知識や考え方、資料批判といった研究方法を獲得する。そしてそれら知識や考え方、研究方法を用いて、自分なりの解釈を構築し、それを文章という形で表現できるようになる、ことを目指しているとなる。なぜこのようにまとめられるのか。

まず「知識・理解とその活用」について見てみよう。ここでは、どんな知識を有しているべきかを記載しているではなく、変化や継続性というように、どういう観点から考察すべきかが記載されている。ここで記載されている観点を見てみると、レベル4～5には、編年史的枠組みに沿って事象を位置づけること、つまり、新旧を比較しながら複数の事象を理解する学習、があるが、レベル6以降には存在しないこと、また、すべてのレベルにおいて、変化や継続性、すなわち歴史事象を時間軸に沿って把握するという観点は存在するが、因果的に把握する学習は、レベル7からしか存在しないこと、従前のレベル6までにおいては、変化の原因を把握する学習があること、などが見て取れる。こうした構成は、91

表1 2007年版ナショナル・カリキュラム「歴史」(イングランド)の到達目標

レベル	到達目標	知識・理解とその活用	本質的理解	解釈の構築と資料活用	文章化
優れた成果	子どもは、地域史・国家史・国家間史に関して、十分に詳細な知識と理解を有している。また、さまざまな歴史的資料を参照し、十分に具体化された分析的な議論を行い、それらを通じて、歴史的变化・継続性・相連性・因果関係に関する探究を企画・遂行するために、先進の知識を用いるようになる。また、異なる地域・異なる時代におこった、様々な出来事とそれによってもたらされた発見とを結び付けて考察するようになる。そして、自身の歴史観に基づく具体的かつ検証された議論や論評をする。また、異なる歴史観や判断について意義づけをし、よくなる。さらに、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な物語、論述文、説明文を作成することができる。	歴史的变化・継続性・相連性・因果関係 異なる地域・異なる時代におこった、様々な出来事とそれによってもたらされた発見	多様な時代・地域の変化・継続性・相連性	自身の歴史観に基づく具体的かつ検証された議論や論評を企画・遂行するために、異なる歴史観や判断について意義づけをし、よくなる	独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な物語、論述文、説明文を作成することができる。
8	子どもは、歴史的变化・継続性・相連性・因果関係に関して具体的な吟味を行うことで、地域史・国家史・国家間史に関して、自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、複数の歴史的な解釈と異なる判断に関して、歴史的に重要な観点から、分析を行い説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	歴史的变化・継続性・相連性・因果関係	記載なし	複数の歴史的な解釈と異なる判断に関して、歴史的に重要な観点から、分析を行い説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	調査手法を改良することで、歴史的な問題や事象に関しての探究方針を提議することで、歴史的に重要な観点から、分析を行い説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。
7	歴史的变化・継続性・相連性・因果関係を分析することで、地域史・国家史・国家間史に関して、自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明する。また、過去の出来事や人物、変化についての評価が、異なる見方に基づけば変化するものであることを説明する。自らの問題意識を再検討し、またこれまでに行った研究のプロセスを振り返ることで、歴史的な問題について研究する。また、その研究に役立つ証拠を探すために、資料の由来・本質・目的といったその資料に関連する問題について吟味するようになる。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。	歴史的变化・継続性・相連性・因果関係	変化・継続性・相連性	過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明する。また、過去の出来事や人物、変化についての評価が、異なる見方に基づけば変化するものであることを説明する。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。	自らの問題意識や研究のプロセスを再検討することで、歴史的な問題について研究する。また、その研究に役立つ証拠を探すために、資料の由来・本質・目的といったその資料に関連する問題について吟味するようになる。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。
6	子どもは、長期的および短期的な相連性・変化・継続性というものの本質と限界を分析し、始めると、地域史・国家史・国家間史に関して、自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、諸原因間の関係性について説明し始めるようになる。過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	長期的および短期的な相連性・変化・継続性というものの本質と限界 諸原因間の関係性	相連性・変化・継続性	過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明する。また、過去の出来事や人物、変化についての評価が、異なる見方に基づけば変化するものであることを説明する。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。	自らの問題意識や研究のプロセスを再検討することで、歴史的な問題について研究する。また、その研究に役立つ証拠を探すために、資料の由来・本質・目的といったその資料に関連する問題について吟味するようになる。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。
5	子どもは、過去の出来事・人物、そして自身の考える編年史的枠組みを明確にする上で必要な過去の社会や時代の主要な特徴を、記述することで、地域史・国家史・国家間史に関して自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、相連性・変化・継続性というものの本質と限界を認識し、始めると、諸原因間の関係性について考察し始める。また、過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	編年史的枠組みを明確にする上で必要な過去の社会や時代の主要な特徴 相連性・変化・継続性というものの本質と限界 諸原因間の関係性	相連性・変化・継続性	過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明する。また、過去の出来事や人物、変化についての評価が、異なる見方に基づけば変化するものであることを説明する。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。	自らの問題意識や研究のプロセスを再検討することで、歴史的な問題について研究する。また、その研究に役立つ証拠を探すために、資料の由来・本質・目的といったその資料に関連する問題について吟味するようになる。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。
4	子どもは、自分たちが学習した、過去の主要な出来事・人物・時代のいくつかについて記述し、それらを編年史的枠組みにそって位置づけることで、地域史・国家史・国家間史に関して自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、長期的および短期的な変化と継続性を確認し、始めると、諸原因間の関係性について考察し始める。また、過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	過去の主要な出来事・人物・時代のいくつか 編年史的枠組みにそって位置づけることで、地域史・国家史・国家間史に関して自分ごとの程度の知識・理解を有しているかを示す。また、長期的および短期的な変化と継続性を確認し、始めると、諸原因間の関係性について考察し始める。また、過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、資料の有効性について批判的に検証し、独力で、具体的な結論を導き出すようになる。また、歴史的な専門用語を十分によく考えて批判的に使いこなすようになる。そして、常に、正確かつ論理的な文章を作成する。	相連性・変化・継続性	過去についての異なる解釈はどのように、またなぜ発生・構築されるのか説明する。また、過去の出来事や人物、変化についての評価が、異なる見方に基づけば変化するものであることを説明する。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。	自らの問題意識や研究のプロセスを再検討することで、歴史的な問題について研究する。また、その研究に役立つ証拠を探すために、資料の由来・本質・目的といったその資料に関連する問題について吟味するようになる。また、十分に体系的な文章を書くために、関連する情報を取捨選択・組織化・使用し、歴史的な専門用語を適切に使用するようになる。

DCSF, QCA, *National Curriculum: Statutory requirements for key stage 3 and 4*, 2007. より訳出, 再構成。
表中の上部に網掛けしている部分は筆者が作成し, それ以外は訳出による。

年版にも共通しており、ピアジェの認知発達の原理⁷⁾(同化調節の原理に基づく漸進性)によるものと考えられる。

次に「本質的理解」である。ここでは、レベルがより上に行くにしたがって、歴史は多様な方法で多様に解釈することが可能であることを認めることから、それらを評価・判断することへと進んでいく。つまり、一貫して歴史の主観性を前提としており、主観性を認める段階から、主観的に評価・構築する段階へと深化しているということである。

そして「解釈の構築と資料活用」である。ここでは、より優れた解釈の構築のために、資料をより適切に活用することが段階的に求められているといえる。すなわち「解釈の構築」においては、解釈を構築することを求められる段階から、よりよい解釈の構築を目指して問題意識や研究のプロセスなどの吟味が求められる段階、それらを踏まえてよりよい解釈の構築が求められる段階というように段階性を踏んでおり、「解釈構築のための資料活用」においては、与えられた資料を活用する段階、与えられた資料の中から自らの研究にとって有効なものだけを選択して活用する段階、与えられた資料の中から、資料の特質に配慮して評価し、高評価のものだけを活用する段階へと、すなわち資料活用から資料選択活用、資料評価活用へと深化していること、が見て取れるからである。

最後に「文章化」である。ここでは一貫して自分なりに解釈を構築し、それを正確かつ体系的に文章化して表現できるようになることが求められ、レベルが上がるに従って、よりより難解な専門用語すらも使いこなして文章で表現できるようになることが求められるようになっている。

この四つの観点とそこに見られる段階性より、2007年版の「到達目標」を見る限り、イングランドの歴史教育の特質を前述のようなものとまとめることが可能となる。こうした構成、およびそこから導き出される2007年版におけるイングランドの歴史教育において育成が目指されている学力は、1991年版と類似点が多く、自らの解釈構築を強く求めること(解釈の構築)、およびそれを文章という形で構築すること(文章化)が、新たに要素として加わっていることが、その相違点といえるだろう。

しかし、ここで一つ疑問が残る。すなわち、求められる解釈や文章とはいかなるものかということである。つまり、探究の過程で得られた知識や考え方、資料批判といった研究方法の善し悪しで判断することになるのであろうが、解釈を自ら構築する際の探究のレベル(善し悪し)と書かれた文章の評価基準に関する記述が具体的ではない、ということである。よって、次節以降では、任意の学習領域「ブリテン島の人々の生活様式、信念、考え方、態度が歴史的に変化してきたこと、および、技術発達、経済発展、戦争、宗教、文化といった諸要因が、こうした変化にどのように作用したか」の中で、特に19世紀の鉄道に焦点を絞り、テスト問題の分析を中心により詳細にみていこう。

Ⅲ. 教科書からみたイングランド歴史教育－概念的認識形成学習－

テスト問題の分析に先んじて、教科書を手がかりに、どのような学習が行われているかを推定しておこう。次節で分析するテスト問題の中には、テストで示された資料だけではなく、それ以外の既習得の知識をも含めて解答することが求められる問題が存在する。よって教科書を手がかりに、その既習得の知識を想定しておくことで、テスト問題の分析から探究のレベルを解明する手掛かりになると考えられるからである。分析対象の教科書は2007年版が策定される前に出版されたものではあるが、現在でも改訂版が出版・使用されており、かつ次節で分析するテスト問題にも登場する人物や資料が取り上げられているため、上記の問題を解明するには十分であると判断できよう。

分析対象の教科書の単元と学習内容から、学習内容の構造を抽出したものを表2として作成した。表中上部に網掛けしている部分は筆者の分析による。以下、表2に基づき考察を行う。

同単元は五つの小単元で構成されている。「大まかな出来事」、「概略」、「1815年から1846年の間に、鉄道産業に変化が起こったのはなぜか」、「1815年から1846年の間のヴィクトリア朝時代の経済と社会の発展に、鉄道が果たした役割は何か」、「鉄道の影響は誇張されているか」である。

冒頭の二つの単元は基礎知識の確認と全体の概略説明であるから、全体の導入単位といえる。では、残る三つの単元は、どのような構成となっているのか。

結論から言えば、三つの単元を通して、産業革命によって鉄道が発達し、それが19世紀以降のイングランドの発展に大きく貢献したことを理解させるとともに、産業論の観点からみた鉄道（輸送業）について概念的に理解させる構成となっている。

すなわち、単元「1815年から1846年の間に、鉄道産業に変化が起こったのはなぜか」では、その単元名が示す通り、鉄道業が発展した要因として、投資熱や技術革新があったことが述べられる。

産業革命によって確立した資本主義経済下においてある産業が飛躍的に発展するには、その産業が提供する財やサービスが市場に求められるものであること（ないしは、十分な市場がある事）、そして、その財やサービスを提供するために十分な三要素が提供されること、加えて、政府の保護があり、競争相手が少ないこと、が条件として考えられる。この単元で取り上げられている諸要因は、この条件に対応しており、ある産業が資本主義経済化で成長・発展する要因を、19世紀の鉄道を事例に学習させることにもつながっているといえるだろう。

続く単元「1815年から1846年の間のヴィクトリア朝時代の経済と社会の発展に、鉄道が果たした役割は何か」では、同様にその単元名が示す通り、都市が大規模化したことや小売業が全国展開化したことなど、鉄道業が発展したことによって発生した19世紀イングランド社会の特質が述べられている。

表2 第10章『経済的变化 1815－1846:鉄道の発達』の単元構成

単元名		単元の構造	
		主な学習内容	学習内容の構造
大まかな出来事		鉄道について基本的な事項の確認 ・ストックンダー－リントン間の鉄道開設(1825) ・リヴァプール－マンチェスター間の鉄道の牽引方式を決めるためのレインビル・トライアル実施(1829) ・リヴァプール－マンチェスター間の鉄道開設(1830) ・投資熱が高じて、最初の「鉄道狂時代」起こる。ジョージ・ハドソンといった鉄道王なども登場(1837-40) ・ロンドン－バーミンガム間の鉄道開設(1838) ・トーマス・クックが最初に周遊券の販売をおこなう(1841) ・グラッドストンによる鉄道法によって、新しく鉄道会社を設立する際の最低基準が定められる(1844) ・第二の「鉄道狂時代」がはじまり、このころ、鉄道の総敷設距離が4500マイルを突破する(1845-47)	鉄道に関する事実の確認 全体の導入 基礎知識の提示と単元の概略説明
	概略	1815～1846年という時代は、鉄道の発達によって諸地域間の結びつきが強まり、劇的な経済的变化が見られた時代だったこと 鉄道は社会的にも強く影響を与えたこと(都市の成長促進、測量士や設計師といった新たな職業の創出、人的・物的交流の活発化、標準時の導入) 当時の変化は産業革命の影響でしかなく、それに対する鉄道の影響を疑問視する者もいること 鉄道は、当時の人々にとっては、経済的発展の象徴というよりむしろ、時代のシンボリック存在であったこと	鉄道の歴史的意味・意義に対する複数の立場の列挙
1815年から1846年の間に、鉄道産業に変化が起こったのはなぜか	技術変化	17世紀の木製の路面軌道を用いた馬車鉄道から鉄製のレールが普及・拡大していき時期に炭鉱業の発展が大きな役割を果たしたこと 蒸気機関車をリチャード・トレビスシクが1813年に発明し、スティーブンソンが改良したことによって、1825年にストックンダー－リントン間で旅客輸送が実現したこと 鉄道によって輸送手段間の競争が見られるようになり、やがて鉄道がそれらを凌駕していくようになったが、その際に、蒸気機関の改良と鋼軌によるレールの導入などがあったこと	蒸気機関の改良及び鉄軌・炭鉱業の発達が鉄道網の発達を鉄道網を建設可能にしたこと 産業が発達する条件① 生産要素としての土地の充実
	鉄道網の新設	初期の鉄道会社が成功を収めたことで、そうした会社への投資熱がおこり、「鉄道狂時代」が到来したこと その投資資金を元手に、1838年までに750キロにも及ぶ鉄道網が整備されたこと 初期の鉄道は一地方内の諸都市を結ぶ短いものだったが、1850年代初ごろまでに、主要な諸都市を結ぶ鉄道網が形成され、産業発展の下地を作ったこと これらを抱った、多くの小規模な会社は、やがて整理・淘汰される運命にあったこと	バブルに伴い、建設資金が流れ込んだこと 産業が発達する要因② 生産要素としての資本の流入
	政府の援助	初期の鉄道は私企業が担っていたことでもあって、無秩序で計画性の低い鉄道建設もあったこと、1840年代ごろから、政府が鉄道の規制に乗り出し始めたこと ジョージ・ハドソンらロビーストの活動により鉄道事業が奨励される一方、1844年の鉄道国有化法の一部が採択され、鉄道会社の査察・事故調査を担当する鉄道省の設置、鉄道運行条件、鉄道の最低価格の設定などが定められたこと	政府の規制があったこと 産業が発達する要因③④ 公的機関の規制による淘汰・寡占化 公的機関の保護による大規模化
	増加する需要	鉄道が発展したことで、鉄と石炭の需要が高まり、製鉄業と炭鉱業が発展したこと 鉄道網が構築されたことで、例えば綿花の産地と貿易港が結ばれるなどといった諸都市間の結びつきが強まり、鉄道は他の産業の発展にも寄与したこと	輸送する側と輸送される側の相補関係 産業が発達する要因⑤ 市場との整合性
	雇用の創出	鉄道の発達によって、例えば炭鉱業と製鉄業などの他の産業が発展し、膨大な雇用が創出されたこと 鉄道自体も、運転士や駅係員、何より申請数故のための多くの土木作業員、など多くの人員を必要としたこと 土木作業員はその超過性やアルコール依存のための評判が悪かったこと 雇用機会が増えたことで、労働争議などを発生して、労働者階級の人々にも配慮することとなり、結果として政治的影響力が付与されるようになったこと	産業が発達する要因⑥ 生産要素としての労働力の流入 鉄道が直接的・間接的に雇用を創出したこと 政治的影響力が労働者階級にも拡大したこと
	移動時間の短縮	駅馬車や船舶は安上がりだったが、時間がかかったこと(例えばロンドン－ヨーク間は、駅馬車ならば一日半かかるとして8時間ですんだこと) 移動時間が短縮したことで、都市間の結びつきが強まり、情報伝達網が整備され、住居を郊外に移し都市部に電車通勤するスタイルが導入され、レジャーも一般的になったこと トマス・クックが1841年に周遊きつぷを初めて導入したこと	鉄道の発展に伴う新たな輸送手段の登場 都市が大規模化したこと レジャーが一般的になったこと
	都市の発達	鉄道によって、いくつかの都市が成立・発達したこと CreweやSwindonのように、鉄道網の結節点に都市が発達したこと 大都市近郊に中産階級向けの宅地開発が進み、都市が拡大したこと 鉄道によって、海沿いの町がリゾート都市として発達したこと Blackpoolのように、主要な鉄道駅に近い海沿いの都市が発達したこと ランカシャー州内の綿花で有名な村も、鉄道によって発達したこと	鉄道建設に伴う村落の都市化 村落の都市化が起こったこと
	知的職業層の発達	産業が発達したことで複雑な契約や商取引が増え、法律家が求められるようになったこと 鉄道狂時代の到来によって取金銭の量が増え、また投資の報酬を巡って争いがあるようになったため会計士といった専門家が求められるようになったこと 新たな鉄道マネジメント法などを研究し、経営者にアドバイスする評論家も見られるようになったこと	鉄道建設に伴う産業発展によって新たな職業が生まれたこと 知的職業層(ホワイトカラー)の発生・発達 19世紀イングランド社会において起きた、現在も残る制度や風習などにおける変化とそれに対する鉄道の直接的・間接的影響
	食品小売業	鉄道によって食品品なども速く安全に輸送できるようになったため、小売業の全国展開・発達が見られ、消費者に選択の幅が広がったこと 他地域との価格競争が激化することを恐れた一部生産者は反対したが、顧客が増え、鉄道網の恩恵を被るようになっていったこと	輸送手段の発達に伴う小売業革命 小売業の全国展開化
	眺望における変化	鉄道は、陸橋やトンネルなどを建設したため、都市ばかりか地方の景観をも一変させたこと アイザム・バード・ブルーネルのように、新技術を駆使し積極的に景観に手を加えるものもいたこと 鉄道が当時の社会を革新し、発展させたことは間違いないが、ラグビー校の校長であったマンシュアー・アーノルドのように、そうした変革に反対する人々も多かったこと	鉄道建設に伴う景観の変貌 都市開発 19世紀の鉄道を事例に運輸・流通業がいかなる社会的影響を与えるか
	他の輸送形態への影響	駅馬車による長距離輸送は、鉄道に水刀打ちできず衰退し、道路使用の需要が減ったため通行料をあげざるを得なくなり、暴動を起こり、廃棄したこと 船舶による輸送は、ある路線の駅から別の路線の駅へ乗り換える手段として存続したが、不採算になったこと 鉄道駅を発着点とする馬車による近距離輸送業者が発達したこと ただ、鉄道は、当初、多くの小規模会社がそれぞれに建設したものであったため、軌道幅がバラバラで、鉄道網が全国的になるにつれて、問題が生じるようになっていったこと	鉄道発展に伴う馬車と船舶輸送への負の影響 競合他者の駆逐(船舶輸送や駅馬車制度の衰退)
	その他	ロンドンで発行された新聞が鉄道で全国に配布されるようになったことで、同じ情報共有を共有し、同じような価値観をもつようになったこと 反奴隷法問題のように、移動や情報伝達手段の発達によって、政治に地方の声を反映させ、政策を変更させることもできるようになったこと 郵便制度が整備されたこと 郵便や情報伝達の発達によって情報革命がおこり、技術革新が促されたこと 鉄道の時刻表を統一するために標準時を定めたこと	鉄道がもたらしたその他の影響(価値観の共有、政治の地方重視化、郵便制度の確立、情報革命と技術革新、標準時の制定)

産業革命によって鉄道の発達から見た鉄道の発展(輸送革命)についての概念的整理

鉄道の影響は誇張されているか	賛成派の場合	一般的に広く知られている。賛成派の主張の列举 ・W. Court, 「19世紀中盤の英国の経済水準は、鉄道の影響なしには成し遂げられなかった」 そのほか、Hobsbawm, Crouzet, Freeman, らの著書からの類似の引用		鉄道によって経済が発展したこと(賛成派)を主張する資料の提示	認識枠組み①の根拠の提示 産業革命→鉄道→19世紀の経済・社会発展
	反対派の場合	近年主張されるようになってきた。反対派(慎重派)の主張の列举 ・B. Micheal, 「炭鉱業のように重要な役割を果たした産業があったことを認めなくては」 そのほか、Hawks, Gournvish, らの著書からの類似の引用		鉄道による経済発展に対する鉄道の影響は大きいこと(反対派)を主張する資料の提示	認識枠組み②の根拠の提示 産業革命→鉄道 ↓ 19世紀の経済・社会発展
練習問題	<p>1. 資料Aを読み、「鉄道がヴィクトリア朝時代の社会を改革する手助けをした」という言葉の意味を説明せよ。</p> <p>2. 資料Dより、鉄道がヴィクトリア朝時代の経済に大きな影響を与えたことを証明するための根拠となる事実を引き出せ。</p> <p>3. 資料BとEを読み、鉄道の影響について批判的な見方をしているこれら二つの資料の共通点を説明せよ。</p> <p>4. 資料Eの筆者は、資料Eのような表現を使うことで、鉄道がイギリス社会を衰退させるということを、どのようにして主張しようとしているか。</p> <p>5. 資料とこの章の内容に基づき、以下の命題に、あなたはどの程度同意するか、説明せよ。 「鉄道はヴィクトリア朝時代の経済と社会に大きな影響を与えた」</p>		<p>A: Norman Gash『ブリテン1815-1865』1987. の一節。鉄道によって安価な物流が可能になったことが生活スタイルに変化を及ぼしたことが書かれている。</p> <p>B: Anthony Wood『19世紀ブリテン1815-1914』1981. の一節。鉄道ができたことで食の影響を被る人々がいた(政治業者や馬主、船舶や運河の管理会社)ことを記述している。</p> <p>C: ウィリアム・フリスによるバディントン駅の様子を描いた絵画。鉄道最盛期のあわただしい駅の喧騒を表現している。</p> <p>D: 鉄道の敷設距離、乗客数、運賃、貨物の運搬量、貨物の料金。の、1830年～1871年(2年ごと)までの推移の一覧表。いずれも右肩上がり。出典: Eric Evans『現代国家の成立: 初期工業社会イギリス, 1783-1870』(Longman)</p> <p>E: J. Francis『英国鉄道史』1851. の一節。鉄道に対する反対意見や音害(トンネル内で窒息するかもしれないことや振動が妨げられるとのイートン校の見解、テムズ川の水位下降の可能性など)を判明している。</p>	<p>問1～2: 資料の読解・必要な情報の抽出</p> <p>問3～4: 資料作成者の意図の分析</p> <p>問5: 二つの認識枠組みのいずれを取るかを判断</p>	19世紀の鉄道にいかなる評価を与えるか 認識枠組み①を重視しつつ、三者の因果関係(鉄道の歴史的意味・意義)をどうとらえるか

Murphy, D., Staton, R., Walsh-Atkins, P., Whiskerd, N., *Britain 1783-1918*, Collins Education, 2003, pp. 165-174. より筆者抽出・作成。
表中の上部に網掛けしている部分は筆者が作成し、それ以外は訳出による。

ここで19世紀イングランド社会の特質として取り上げられているのは、現在のイングランド社会においても現存する特質のみである。このことから、鉄道という社会事象が今の社会の構築にどのように貢献したかを学ぶことにもなっているといえる。このように今の特質と過去の事象を因果的に結びつけて考えることで、鉄道、ひいては輸送業という産業が社会というものに、いかにして影響を与えるかを一般的に考察することにもつながりうる。つまり、ここでは、19世紀の鉄道を事例に運輸・流通業がいかなる社会的影響を与えるかを学習させることにもなっている、といえるだろう。

そして最後に単元「鉄道の影響は誇張されているか」では、鉄道業、その発展をもたらした諸要因(および、その諸要因の根本原因である産業革命にともなう工業化)、19世紀の社会・経済発展、の三者をどう因果的に結び付けるかに関して、これまでの学習にのっとって直線的に結び付ける見方と、それを覆す複線的に結び付ける見方とを示し、それぞれの根拠となりうる記述が列挙されている。ここから、同単元は、これまでの学習内容を相対化することを目的としているように見受けられる。ただし、これまでの学習にのっとった考え方を一般的と提示し、覆す見方を近年そういう主張を行う者もでてきていると伝えることにより、明らかに前者の見方をより優位なものとして扱い、鉄道という事象をとらえさせようとしていることがわかる。

このように、これら三つの単元では、産業革命によって鉄道が発達し、それが19世紀以降のイングランドの発展に大きく貢献したことを理解させ(部分的に相対化させ)、と同時に、産業論の観点からみた鉄道(輸送業)について概念的に理解させる構成となっているといえる。

IV. GCSE 試験問題からみたイングランド歴史教育—概念的解釈構築学習—

GCSE (General Certificate of Secondary Education, 中等教育資格試験) は、義務教育段階終了時 (KS4修了段階, 16歳) に、義務教育段階修了程度の学力を有していることを証明するために受験するもので、イングランドの義務教育段階の歴史教育が、最終的にどのような学力を育成しようとしているかが、最も端的に表れていると考えられる試験である。History を受験するものはあまり多くない (近年増加している⁸⁾) が、A* と A ~ G (合格) と U (不合格) までの九段階で評価され、大学入学やシックスフォーム入学の基礎要件でもあり、かつ就職試験に活用されることもあるため、多くの学生が受験する。

分析対象とした AQA の2011年版の GCSE においては、History は A と B の2科目があり、どちらを受験するかは、受験者の自由である。A がテーマ史および19世紀以前の歴史を対象としており、B が現在の国際関係を含む20世紀の歴史を対象としている。

取り上げた事例は、History A の Unit 2 の Option B の Question 1 である。History A は、Unit が四つあり、1と4が選択で2と3が必答、3はコースワークとなっている。その Unit 2 は A ~ D の中から1問選択することとなっており、A は19世紀アメリカ西部、B は19世紀イギリス、C はエリザベス朝時代のイングランド、D はナチスドイツとなっている。また、B は Question 1 ~ 3 の三問からなり、1 が必答、2と3がどちらかを選択することとなっている。

Question 1 は、資料が A ~ E まで五つ提示され、それらに基づき五つの設問すべてに答えることが求められる問題である。Question 1 の問題と解答例、および採点基準などをもとに、その探究の質に関する段階を抽出し、表3としてまとめた。表中上部に網掛けしている部分は筆者の分析による。以下、表3に基づき考察しよう。

まず、問題 (a) 「資料 A および B からは、鉄道について、どのようなことが読み取れるか?」と (b) 「資料 C および D から、鉄道について、どういった異なる印象が読み取れるか? 資料 A, B, C, D を使って説明せよ」である。その評価の観点、および解答例とその段階より、これらはどちらも、与えられた資料から必要な情報を抜き出し、その情報の理由を説明させる問題といえる。それぞれ二つの資料を参照することとなっており、(a) で示されているのは、鉄道に否定的なイメージを持っていることがうかがえる資料となっており、(b) で示されているのは、鉄道に肯定的なイメージを持っていることがうかがえる資料となっている。いずれにしても、的確な資料読解の可否が採点の基準といえる。

次に、問題 (c) 「資料 A および B が、資料 C および D とは異なる印象を与える理由は、なぜだと思うか。資料 A, B, C, D および、あなたの知っていることを交えて、説明しなさい」である。資料作成者の意図の比較分析を行わせる問題といえるが、問題はその採点基準の段階である。まずレベル1は「資料から抜き出した瑣末な事実の中から一部を選択しただけの解答、ないしは、資料がどのように異なっているかを指摘しているだけの解

[illegible]

General Certificate of Secondary Education June 2011 GCSE History A (40402B) Unit 2 Option B Britain, 1815–1851 Mark Scheme (http://filestore.aaa.org.uk/subjects/AOA-40402B-W-MS-JUN11.PDF)に基づき筆者作成。
表中の上部に網掛けしている部分は筆者が作成し、それ以外は訳出による。

答」とあるように、資料にある内容だけで説明するか理由の説明になっておらず、ただ違いを指摘しただけのレベルといえる。次にレベル2は「作成者、聴衆、時間、場所といった違いに依拠した単純な理由付けを行っている解答」となっているように、資料にない内容を踏まえ、単一の要素を指摘し説明するレベルといえる。そしてレベル3は「作成者、聴衆、時間、場所といった違いに依拠した合理的な理由付けを行っている解答。加えて、作者が根拠とした情報や作品に込めた意図にも言及した解答であることが望ましい」とあるように、資料にない内容を踏まえ、複数の要素を指摘し説明するレベル、最後にレベル4は「レベル3よりも優れており、かつ資料が異なる印象を与える理由を複数指摘し、それらを結び付けて説明している」となっているのであるから、資料にない知識を踏まえ、複数の要素を関連付けて指摘し説明するレベル、といえる。

では、採点基準に見られる段階性と模範解答例をより詳細に検証してみよう。まず、資料に書いていることだけを指摘すればすむレベル1からレベル2の模範解答例に至るためには、鉄道が資料AやBが書かれた1820年代に登場し、資料Dが書かれた1830年にある程度の富裕層ならば利用できる程度に拡大し、資料Cが書かれた1850年代には広く普及していたこと（すなわち鉄道の発展の歴史）を知らないと説明できない。同様に、レベル3の模範回答へと至るためには、レベル2のような鉄道に関する知識を複数指摘する必要があるから、レベル2よりも知識の量（フリスがいかなる人物であったかなど）が必要となる。そして、レベル4の模範回答へと至るためには、それぞれの作者がそのような記述や絵画を描いた理由を直接経験の有無と結び付け、同時に有名な俳優一家に生まれ自身も有名な女優（中流階級）であった資料Dの作者であったからこそ、鉄道の敷設に貢献した人物その人のエスコートで鉄道のいい面だけを直接経験でき、結果として好意的な記述となったことに言及し説明している。つまり、レベル3で指摘した複数の要素を関連付けて、直接経験の有無（量）とその質（それを実現しえた著者の人となりによる特別扱い）の観点から、当時の階級という特質にも着目しながら解答する必要がある。

このように、鉄道の歴史やその社会的意義・意味、そして当時の階級社会としての特質に基づき、資料を活用し、より概念的な認識にまで踏み込んだ解釈を構築、表現できることが求められている。

こうした段階性は、問題（d）でも同様である。

すなわち、問題（d）「資料Eは、19世紀の土木作業員の生活と労働を理解するために、どのように有効か？資料Eおよび、あなたの知っていることを交えて、説明しなさい」は、資料の有効性を評価させる問題であるが、当時の土木作業員の生活状況・労働環境がどういうものであったのかを知るために、この資料が有効か否かを評価するのであるから、19世紀の土木作業員がどういう生活をしており、どういう労働状況であったかを知っていることが大前提である。

この場合の土木作業員の生活状況・労働環境は、教科書より、産業革命や農業革命によっ

て機械化が起こり、それによって労働者に余剰が生まれていたこと、その余剰労働力を吸収しうる存在として鉄道産業が寄与したこと、そうした労働力が流入したことで鉄道網の発展はあったが、大量に流入した労働者は評判が悪かったこと、雇用機会が増大したことで、労働争議などを警戒して、労働者階級の人々にも配慮することとなり、結果として政治的影響力が付与されるようになったこと、などが学ばれていると考えられるから、労働環境・条件としては、大量の土木作業員が流入しうる余地があったため、需要と供給の関係から労働条件は当初はあまり良くなかったと推察されること、それでも大量の労働力が流入したこと（それだけ労働力余剰の状態だったこと）、そうした労働力の流入によって鉄道網の拡充は実現しえたこと、労働争議や工場法などを通じて、徐々に改善していったこと、生活環境としては、労働条件があまり芳しくないのであるから生活環境もそれに比例して当初はあまり良くなかったと推察されること、そのような生活環境の辛苦をごまかすためにアルコールによる現実逃避を求めるものが多くいたこと、その結果としてのアルコール依存や粗野であることによりそのような労働者自体の評判はよくなかったこと、というような認識を形成していると推察される。

そのような認識を形成しているという前提下で、問題（d）について分析すると、資料に書かれていることだけを説明するレベル1、資料にない知識を踏まえ、単一の要素（資料の出自か内容）に着目して説明するレベル2、資料にない知識を踏まえ、複数の要素（資料の出自と内容）に着目して説明するレベル3、資料にない知識を踏まえ、複数の要素（資料の出自と内容）を関連させて説明するレベル4、となっており、問題（c）と同様の段階が確認できる。

問題（d）は、そもそも、より概念的な認識を有していることを示し、それに言及したうえで、有効か否かを主張することが求められており、既習得の認識のレベルが解答の段階性となっているといえるだろう。

そして、最後に問題（e）「ブリテン島の発展にとって、なぜ鉄道が重要だったのか、説明しなさい」である。先の教科書分析では、19世紀のブリテンの経済的・社会的発展に鉄道が重要だったとする見方とそれほどでもなかったとする見方と二つを提示していたが（後者については限定的な指摘ではあったが）、ここでは、重要であったとする前者の見方にに基づき、それを説明する問題である。この問題では、提示された資料はあまり関係なく（むしろ資料から判明する事実を記載しただけではレベル1と判断され）、鉄道という事象に関していかなる認識を形成しているかが、解答のレベル判定基準として使われていることになる。ではどのような認識が求められているのか。その解答の基準をレベル毎に見てみると、19世紀イングランド社会において起きた、現在にも残る制度や風習などにおける変化とそれに対する鉄道の直接的・間接的影響について、一つを簡潔に指摘するレベル1、複数を簡潔に指摘するか一つを詳しく説明するレベル2、複数を詳しく説明するレベル3、複数を関連付けるか序列化して説明するレベル4となっている。最も上位のレベル4を見て

みると、鉄道が19世紀の社会に及ぼした影響を複数関連付けて説明するか、序列化して指摘することが求められる。後者の場合必要になってくるのは、どれが最も重要かの判断であるが、その判断を行うためには、一つの要素の因果関係を理解しているだけでは不可能である。輸送業が社会にいかなる影響を与えうるかを把握したうえで、そのような影響のうち、鉄道が19世紀およびそれ以降の社会に与えたもので、もっとも重要なある特定の要素を選択することが必要となる。また、前者の場合は、鉄道と19世紀社会との間に存在する二つ以上の因果関係が、それぞれどのようにして成立しているかを理解したうえで、より高次の認識に基づき、二つを結びつける必要がある。いずれにしても、レベル4に解答に必須なのは、輸送業が社会にいかなる影響を与えうるかに関する概念的知識と、その観点からみて、鉄道という事例はいかなる影響を与ええたのかに関する判断といえる。

このように、評価問題を順に見てくると、資料読解の可否を問う (a)、(b)、認識の質と量を問う (c)、(d)、概念的知識とそれに基づく判断を問う (e) という問題構成となっているといえるだろう。これら五問のうち、(a) ～ (d) でそれぞれ問われているものは、(e) を行うための基礎的な要素といえるから、本来、GCSE で目指されているのは、概念的知識に基づく判断（解釈構築）といえるのではないだろうか。

V. イングランド歴史教育再考

以上の分析から、イングランドの歴史教育についてその特質を考察しよう。そのために図1を作成した。

先行研究⁹⁾でも指摘されているとおり、カリキュラムだけを見る限り、英国の歴史教育の特質として、方法的認識（先行研究の言葉を借りれば *second-order concepts*）を重視していることが確認できる。また内容的な認識（およびそのための「学習の範囲と内容」）については、十分な言及がないため、方法的認識を重視しているように感じられる。ただ、仮に方法的認識だけを重視しているとするならば、内容的認識がいかなる種類のものであれ、それを活用して自分なりに認識形成出来さえすればそれでいいということになる。果たして、英国の歴史教育の目的はそのようなものと理解して問題ないのか。

このような問題意識に立ち、同じく公的機関がその適否を審査し、高等教育への進学試験の基礎要件などにも利用される GCSE の試験問題を手がかりに分析すると、内容的な認識に対して、より科学的・概念的であることが求められていることが判明した。ナショナル・カリキュラムと同じく公的機関がその適否を判定するものである以上、GCSE でなされていることが、イングランド歴史教育において最終的に目指されているものと判断できるだろう。これはこれまでの研究で指摘されてきたイングランド歴史教育論の特質とは似て非なるものである。なぜなら、方法的な認識を目的とする教育論との評価から、方法的な認識を手段とし、科学的な認識を形成することを目的とする教育論との評価に変更を余儀なくされるからである。

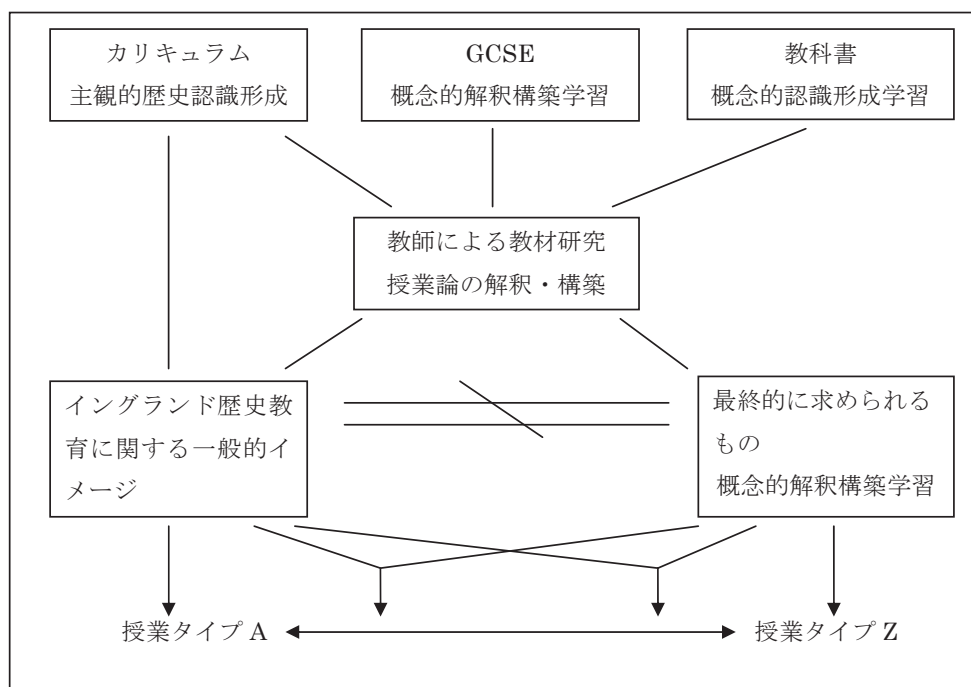


図1：イングランド歴史教育の現状とその多様性

以上のことから英国の歴史教育の特質を端的にまとめると、歴史は主観的な構築物であるとの前提に立ち、授業において歴史事象を手がかりに吟味・探究し、その過程でより概念的な知識、変化や因果といった歴史的な考え方、資料批判といった研究方法を獲得する。そしてそれら知識や考え方や研究方法を用いてより一般的な解釈を構築し、それを体系的な文章で表現できるようになることを目指している、といえるのではないだろうか。ただし、冒頭の問題意識でも述べた通り、イングランドのナショナル・カリキュラムの場合、実践者の裁量が大きく認められていることがその特質である。GCSEで目指されているものとナショナル・カリキュラムにおいて元々目指されているもの、その二つをどのように組み合わせるか、学校段階や学習者の実態によっても異なろう。残された課題は、その多様性を確認し、実際の授業の分析、および実践者へのインタビューなどを通じて証明することである。しかし、ひとまず、イングランドの歴史教育は、従来のイメージとは異なるものであることを指摘し、筆を置くこととしたい。

VI. 結語

本発表の目的は、カリキュラム、教科書、評価問題の三つを手がかりに、イングランドの歴史教育について、考察することであった。

特に評価問題の分析から、①資料を読み解き、資料から必要な情報が引き出せるか、と

いった方法的な認識（2007年版ナショナル・カリキュラムにおいて、「重要な概念」や「重要な方法」として示されているもの）の可否を評価の指標としている問題に加え、そのような方法的な認識を用いて探究した結果を表現することが求められる問題も存在すること、②後者の問題の模範解答や採点基準などから、どのような探究を行うことが目指され、結果としてどのような成果としての認識が求められているのかを分析した結果、19世紀のイングランドの鉄道に関する認識ではなく、より概念的・一般的な認識（輸送業全体に関する認識である場合と19世紀社会全体に関わる認識とがあったが）が求められていることがうかがえた。

これらのことから、イングランド歴史教育が、従来のカリキュラム分析を通じた通説とは異なる歴史教育であること、すなわち、方法的認識を育成するとともに、それを用いて、歴史事象を論理的に分析し、一般的・概念的な認識を形成できることを目指すものであること、が解明できた。

【註】

- 1) DCSF, QCA, *National Curriculum: Statutory requirements for key stage 3 and 4*, 2007.
- 2) Murphy, D., Staton, R, Walsh-Atkins, P., Whiskerd, N., *Britain 1783 – 1918*, Collins Education, 2003, pp. 165 – 174.
- 3) AQA の GCSE の History の過去問は、2013年7月28日現在、2010年版、2011年版、2012年版について、以下のサイトから検索し、ダウンロードすることが可能である。各 Unit について、資料編、問題編、模範解答および配点編、報告書の4つが存在するが、Unit によっては、すべてが公開されていないものもある。
<http://www.aqa.org.uk/subjects/history/gcse>
- 4) 拙稿「歴史教育内容編成の構造と原理－イングランド、91年版ナショナル・カリキュラムを手がかりとして－」『社会科研究』2005年、pp. 31 – 40。
- 5) 例えば以下の論文などが参考になる。同論文は、特に大きな変更がなされた1995年版のナショナル・カリキュラムに関して、その変更点やその際なされた議論などを詳細に記載している。
竹田清夫「イギリスの全国教育課程についてⅡ－全国教育課程および標準評価を巡る論議－」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第45巻、1996年、pp. 321 – 340。
- 6) イングランドの2007年版ナショナル・カリキュラム「歴史」を取り上げた研究には、以下のものがある。いずれも、評価問題までを対象とした分析とはなっていない。
・二井正浩「平成20年版学習指導要領と2008年版英国ナショナルカリキュラムにおける歴史学習－前期中等教育を事例にして－」『社会系教科教育学研究』第20号、

2008年, pp. 51-60。

- ・伊東彩子「イギリスにおける歴史教育の動向－研究と実践から見出される展望と課題－」『社会科教育研究』第116号, 2012年, pp. 113-124。

7) 詳細は以下の文献等を参照のこと。

- ・H. G. ファース著, 植田郁朗, 大伴公馬訳『ピアジェの認識理論』明治図書, 1972年。

- ・J. ピアジェ著, 波多野完治, 滝沢武久訳『知能の心理学』みすず書房, 1960年。

8) 前掲6), 伊東論文, p. 115。

9) 前掲6) など。